

ちゅうもん おお りょうりてん
「注文の多い料理店」

みやざわけんじ
宮沢賢治

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「鹿の黄色な横っ腹なんぞに、二三発お見舞いもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたっと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠なって、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「実に僕は、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼を、ちょっとかえしてみ言いました。

「僕は二千八百円の損害だ。」と、も一人が、悔しそうに、頭をまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔を悪くして、じっと、も一人の紳士の、顔つきを見ながら言いました。

「僕はもう戻ろうと思う。」

「さあ、僕もちょうど寒くはなったし腹は空いてきたし戻ろうと思う。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあにに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい。」

「兎も出ていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。